

アカオネッタイチョウ

Phaethon rubricauda rothschildi

ネッタイチョウ目
ネッタイチョウ科

小笠原諸島 **VU**

環境省 **EN**

【形態・生態】

全長 90cm。体は白く、嘴が赤い。尾羽の中心の2枚が赤く、長く伸びる。幼鳥では嘴が黒く、翼に黒斑があり、赤い尾羽の伸長がない。火山列島、南鳥島では、冬から春に繁殖地に飛来し、7月ごろに巣立つと考えられる。集団繁殖し、繁殖地では昼行性で、巣の近くで着陸前にヒラヒラと飛び回る。空中からダイビングをして海の表層の魚類を採食する。

【分布の概要】

小笠原諸島、インド洋、太平洋の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

営巣場所は無人島の岩の間、低木林内、海岸林の高木の根元などで、地上に営巣する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

南硫黄島は、日本における本種の主要な繁殖地だが、主に海岸で繁殖しているため、台風などによる波の影響を受けて繁殖に失敗しやすいと考えられる。安定した繁殖地が限られており、繁殖個体数も少ないため、モニタリングが必要である。

【関連文献】

Chiba, H. et al., 2007; 川上和人ら, 2008.

(執筆: 川上和人)



アカガシラカラスバト

Columba janthina nitens

ハト目
ハト科

小笠原諸島 **CR**

環境省 **CR**

【形態・生態】

全長 40cm。全身黒色で、頭から体にかけて紫色から緑色の金属光沢がある。他の亜種に比べると、頭部の赤味が強い。若鳥では赤味が弱く、全体に黒っぽく見える。繁殖は主に11～3月ごろにかけて行い、タコヅルなどの茂みに地上営巣することが多い。基本的に種子食で、しばしば島間を移動する。

【分布の概要】

留鳥として小笠原諸島に分布する。

【小笠原諸島における生息環境】

主に、過去にあまりかく乱を受けていない樹林で営巣が見つまっている。非繁殖期には、農地や集落周辺に出現することもある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ネコによる捕食が脅威となっている。主に種子食であるため、通年種子生産される多様性の高い樹林が必要である。クマネズミが食物である種子を巡る競争相手になっている可能性がある。山域でのネコの排除により、近年は個体数回復の兆しを見せている。

【関連文献】

高野肇, 2002; 鈴木創ら, 2006.

(執筆: 川上和人)



オガサワラカラスバト

Columba versicolor

ハト目
ハト科

小笠原諸島 **EX**

環境省 **EX**

【形態・生態】

全長 45cm。全身が暗灰色だが、頭部に緑色の金属光沢があり、背は紫色の光沢がある。地上で種子を採食していたと考えられるが、生態についてはほとんど何も分かっていない。

【分布の概要】

留鳥として小笠原諸島に分布していた。

【小笠原諸島における生息環境】

高木林内に生息していたと考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島および媒島でのみ記録があり、1889年の採集記録以後は確実な記録がなく、絶滅した。絶滅の原因は不明だが、地上採食性と考えられることから、地上性哺乳類による捕食が一因となったと考えられる。また、樹林の減少も原因の一つと考えられている。

【関連文献】

榎山徳太郎, 1930; Greenway, J. C. Jr., 1958.

出典: Watercolour by Lydia Kingsley Kefford (c.1900), copied from a picture by F.H. Von Kittlitz.



(執筆: 川上和人)

コアホウドリ

Phoebastria immutabilis

ミズナギドリ目
アホウドリ科

小笠原諸島 **EN**

環境省 **EN**

【形態・生態】

全長 80cm。体は白色で、翼の上面と尾羽は濃灰色。12月ごろから繁殖地に飛来し、5月ごろに巣立つ。地上で集団繁殖し、繁殖地内をよく歩き回る。繁殖地には、繁殖に参加しない若鳥も飛来する。繁殖期以外は基本的に洋上で生活する。

【分布の概要】

小笠原諸島、ハワイ諸島で繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

無人島のイネ科草本などが生育する草地や、タコノキの下、草地に近い低木林内などで繁殖する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

南鳥島では、1900年ごろまで繁殖していたが、乱獲により絶滅した。戦前の小笠原群島での繁殖状況は不明だが、聳島列島では1976年から繁殖を開始した。繁殖個体にはハワイ産の個体が見つまっている。ノヤギによるかく乱のために繁殖が阻害されていたと考えられるが、ノヤギの排除後もあまり個体数が増加していない。漁業による混獲のおそれがある。

【関連文献】

Bryan, W. A., 1903; 倉田洋二, 1978.

(執筆者: 川上和人)



クロアジアホウドリ

Phoebastria nigripes

ミズナギドリ目
アホウドリ科

小笠原諸島 *

環境省

【形態・生態】

全長 70cm。翼が長く、全身が黒色で、嘴基部の羽毛、目の後方、腰に白色部がある。12月ごろから繁殖地に飛来し、5月ごろに巣立つ。地上で集団繁殖し、繁殖地内をよく歩き回る。繁殖地には、繁殖に参加しない若鳥も飛来する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、ハワイ諸島で繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

無人島のイネ科草本などが生育する草地や、タコノキの下、草地に近い低木林内などで繁殖する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

小笠原諸島の様々な島で繁殖していたが、乱獲により激減し、20世紀後半には繁殖地が聳島列島に限定されていた。ノヤギによるかく乱のために繁殖が阻害されていたと考えられる。ノヤギの排除後、個体数が増加し、最近では繁殖分布が母島列島、父島列島まで拡大している。漁業による混獲のおそれがある。

【関連文献】

Chiba, H. et al., 2007; 福寿兼央ら, 2011.

(執筆者: 川上和人)



アホウドリ

Phoebastria albatrus

ミズナギドリ目
アホウドリ科

小笠原諸島 **CR**

環境省 **VU**

【形態・生態】

全長 90cm。成鳥は胸が白く頭部は黄色。翼の先端と後縁、尾の先端は黒褐色。羽色は年齢によって変化し、10年ほどで完全な成鳥羽になる。翼が長く、ほとんど羽ばたかずに長距離を飛行する。地上で集団繁殖し、10月ごろから繁殖地に渡来し、雛は5月ごろに巣立つ。魚類やイカなどを海の表層で採食する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、尖閣諸島で繁殖していたが小笠原諸島では絶滅。2008年より聳島に新たな繁殖地をつくる取組が行われている。

【小笠原諸島における生息環境】

草地や裸地などの開放地で繁殖していたと考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前には、少なくとも北之島および西之島において多数が繁殖していたが、乱獲により20世紀初頭に絶滅した。2008年より、伊豆諸島鳥島から聳島に雛を輸送し、人工育雛により巣立たせている。これらの個体が成長後に聳島で繁殖に入ることが期待されている。若鳥が自然に飛来することもある。

【関連文献】

初山徳太郎, 1930; Chiba, H. et al., 2007.

(執筆者: 川上和人)



シロハラミズナギドリ

*Pterodroma hypoleuca*ミズナギドリ目
ミズナギドリ科

小笠原諸島

VU

環境省

DD

【形態・生態】

全長 30cm。体の上面が黒く、下面が白い。翼の下面は白く、翼角付近から体側後方に向け黒い帯が伸びる。鼻孔が前向きに開口する。南硫黄島では6月に全身が綿羽に包まれた雛が確認されている。集団繁殖し、繁殖地では夜行性である。

【分布の概要】

小笠原諸島、ハワイ諸島で繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

南硫黄島では、標高 400m 以上の樹林内の地面に掘った穴の中で繁殖している。戦前は、低標高地のタコノキの下などで繁殖していた。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前は、聳島列島から硫黄列島まで多くの島で繁殖していたが、現在は北之島と南硫黄島でのみ繁殖する。ネズミ類による捕食により繁殖集団が消滅したと考えられる。ネズミ類の駆除により、繁殖分布が拡大する可能性がある。有人島にもよく不時着し、しばしばネコに捕食されるため、野外でのネコの管理を行うことが望ましい。

【関連文献】

川上和人ら, 2008; 千葉勇人ら, 2012.

(執筆: 川上和人)



© 石田光史

コミズナギドリ

*Puffinus nativitatis*ミズナギドリ目
ミズナギドリ科

小笠原諸島

EX

環境省

【形態・生態】

全長 36cm。全身暗褐色で、翼の下面も黒い。魚類やイカなどを採食する。繁殖期以外は基本的に洋上で生活する。おそらくトゲミウドノキのものと考えられる付着型種子が多数ついた標本が採集されており、種子散布者となっている可能性がある。

【分布の概要】

太平洋の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

低木の茂みや木の根もとなどで繁殖していた。地中の穴はあまり利用しない。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1902年には南鳥島での繁殖が確認されていたが、その後の記録はなく、小笠原諸島での繁殖集団は絶滅した。南鳥島では、多くの海鳥の乱獲が行われていたことから、これが主な絶滅の原因と考えられる。

【関連文献】

Bryan, W. A., 1903; Kuroda, N., 1954.

(執筆: 川上和人)



© 戸塚学

セグロミズナギドリ

*Puffinus lherminieri bannermani*ミズナギドリ目
ミズナギドリ科

小笠原諸島

EN

環境省

EN

【形態・生態】

全長 31cm。体の上面が黒く、下面が白い。翼の後方で、腹側の白色部が背側に食い込んで見える。鼻孔が上向きに開口している。3月ごろから繁殖地に飛来し、9月ごろに巣立つ。集団繁殖し、繁殖地では夜行性である。

【分布の概要】

小笠原諸島で繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

樹林または草原の地面に掘った穴の中で繁殖している。南硫黄島では標高 800m 以上の場所に生息するが、東島では低標高地に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在判明している繁殖地は東島と南硫黄島の2箇所のみである。南硫黄島では繁殖集団が局所絶滅しており、その原因はネズミ類による捕食にあると考えられる。すでに多くの小島で局所絶滅していると考えられ、無人島でのネズミ類駆除が望ましい。有人島では、不時着時にネコに捕食されることもあるため、野外でのネコの管理を行うことが望ましい。

【関連文献】

Chiba, H. et al., 2007; 川上和人ら, 2008.

(執筆: 川上和人)



© 川上和人

オガサワラヒメミズナギドリ

Puffinus bryani

ミズナギドリ目
ミズナギドリ科

小笠原諸島 **CR**

環境省 **CR**

【形態・生態】

全長 30cm。体の上面が黒く、下面が白い。セグロミズナギドリに似るが一回り小さく、眼の上まで下面の白色部が広がっている。下尾筒は黒く、足が青灰色である。冬に繁殖していると考えられる。

【分布の概要】

小笠原諸島、ミッドウェイ諸島にて記録がある。後者での記録は2例のみ。

【小笠原諸島における生息環境】

低木林または開放地が現在の本種の生息地と考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

小笠原諸島での確実な記録は、母島1個体、父島1個体、無人島での4個体に限られている。現在の繁殖地は小笠原のみと考えられるが、個体数は極めて少ない。無人島で見つかったのは全て死体で、3個体からはクマネズミによる捕食痕が見つかった。本種は体が小さく、ネズミの捕食が個体数減少の主要因と考えられる。また、ギンネムなどの外来植物の繁茂により生息環境が悪化していると考えられ、外来動植物の管理が望ましい。

【関連文献】

Pyle, P. et al., 2011; Kawakami, K., et al., 2012.

(執筆者：川上和人)



©NPO 法人小笠原自然文化研究所

鳥類

小笠原諸島

アナドリ

Bulweria bulwerii

ミズナギドリ目
ミズナギドリ科

小笠原諸島 **NT**

環境省

【形態・生態】

全長 27cm。全身が黒色で、翼の上面には褐色の M 字型の斑がある。翼が長く、あまり羽ばたかない。5月ごろから繁殖地に飛来し、9月ごろに巣立つ。集団繁殖し、繁殖地では夜行性で、夜間に飛来し、夜明け前に飛去する。

【分布の概要】

小笠原諸島、世界の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

樹林内の地中や落葉の下、草原の草の下、開放地の地中、岩やラピエ（石灰岩が侵食や風化を受けてできた地形）の隙間などで繁殖する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前に比べ繁殖分布が縮小している。クマネズミによる卵および成鳥の捕食が確認されており、これが分布縮小の主要因と考えられる。東島ではクマネズミにより多数の成鳥が捕食されたが、2008年、2009年にネズミ駆除が行われ、緊急の危機は脱した。すでに多くの小島で局所絶滅していると考えられ、無人島でのネズミ類駆除が望ましい。

【関連文献】

Chiba, H. et al., 2007; Kawakami, K. et al., 2010.

(執筆者：川上和人)



©川上和人

オーストンウミツバメ

Oceanodroma tristrami

ミズナギドリ目
ウミツバメ科

小笠原諸島 **EN**

環境省 **NT**

【形態・生態】

全長 25cm。全身が黒褐色で、尾羽は燕尾型をしている。よくグライディングを行うが、波頭の上で小刻みに羽ばたきを交えることも多い。繁殖のため12月ごろから繁殖地に飛来し、4月ごろに巣立つ。繁殖地では夜行性で、夜間に飛来し、夜明け前に飛去する。繁殖期以外は基本的に洋上で生活する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、ハワイ諸島で繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

樹林または草地の地面に掘った穴で繁殖している。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

体サイズが小さいため、クマネズミによる捕食を受けやすく、現在の繁殖分布は限られている。クマネズミの食物が不足する冬に繁殖するため、捕食されやすいと考えられる。すでに多くの小島で局所絶滅していると考えられ、無人島でのネズミ類駆除が望ましい。

【関連文献】

長谷川博, 1992; Chiba, H. et al., 2007.

(執筆者：川上和人)



©川上和人

クロウミツバメ

Oceanodroma matsudairae

ミズナギドリ目
ウミツバメ科

小笠原諸島 **CR**

環境省 **NT**

【形態・生態】

全長 25cm。オーストンウミツバメと類似した形態を持っているが、翼上面の初列風切羽の基部に白い斑がある。南硫黄島では、6月下旬に卵から巣立ち直前の雛まで、様々な繁殖段階が見られたことから、繁殖期は同調せず長期にわたると考えられる。集団繁殖し、繁殖地では夜行性である。

【分布の概要】

小笠原諸島で繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

標高 750m 以上の土壌の発達した樹林および草地の地面に掘った穴の中で繁殖をする。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前には北硫黄島でも繁殖が確認されていたが、現在は南硫黄島が唯一の繁殖地となっている。北硫黄島での局所絶滅はネズミ類による捕食が原因と考えられる。南硫黄島へのネズミ類の侵入を防止することが望ましい。また、繁殖地の地形が急峻で土砂崩れなどの危険性があるため、モニタリングが必要である。

【関連文献】

Chiba, H. et al., 2007; 川上和人ら, 2008.

(執筆: 川上和人)



オオゲンカンドリ

Fregata minor minor

カツオドリ目
ゲンカンドリ科

小笠原諸島 **EX**

環境省

【形態・生態】

全長 90cm。雄成鳥では全身が黒く、金属光沢がある。若鳥では胸に白斑が出る。尾羽が燕尾型をしている。繁殖地では、カツオドリやネツタイチョウなどが雛に持ち帰る魚などを奪って採食することがある。

【分布の概要】

インド洋、太平洋、大西洋西部の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

南鳥島の高木の樹上に営巣していた。地上はあまり使わなかったと考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1902年には南鳥島での繁殖が確認されていたが、その後の記録はなく、小笠原諸島での繁殖集団は絶滅した。南鳥島では、多くの海鳥の乱獲が行われていたことから、これが主な絶滅原因と考えられる。国外での繁殖個体が小笠原に飛来することは珍しくない。

【関連文献】

Bryan, W. A., 1903; Kuroda, N., 1954.

(執筆: 川上和人)



アオツラカツオドリ

Sula dactylatra personata

カツオドリ目
カツオドリ科

小笠原諸島 **VU**

環境省

【形態・生態】

全長 90cm。成鳥では、体は白く、風切羽が黒く、顔が濃紺で、足が青い。若鳥は、頭部と翼、背、尾が褐色である。西之島では、カツオドリの集団繁殖地内で、7月ごろに巣立ち幼鳥が親とともに行動する姿が見られている。通常 2 卵を生むが、兄弟殺しをするため 1 雛しか育たない。空中からダイビングをして海の表層の魚介類を採食する。

【分布の概要】

小笠原諸島、世界の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

無人島の開放地の草地または岩場で繁殖する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西之島でのみ繁殖が確認されている。繁殖個体数は 1990 年代から比べると増加傾向にあるが、その数は非常に少ない。西之島は 1973 年に噴火しており、今後も噴火の可能性がある。本種の個体数推移についてモニタリングする必要がある。

【関連文献】

川上和人ら, 2005; Chiba, H. et al., 2007.

(執筆: 川上和人)



アカアシカツオドリ

Sula sula rubripes

カツオドリ目
カツオドリ科

小笠原諸島

VU

環境省

EN

【形態・生態】

全長 70cm。成鳥では全身が白く、風切羽が黒く、足が赤い。若鳥では、全身が灰褐色である。小笠原諸島では、6月に営巣した例がある。空中からダイビングをして海の表層の魚介類を採食する。

【分布の概要】

世界の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

火山列島では標高 200～300m にある樹林帯で、集団で木にとまっている姿がよく見られる。母島では、小さな岩礁上の開放地で営巣したことがある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

小笠原諸島では、1例の営巣記録があるのみだが、北硫黄島、南硫黄島では集団で樹上にとまっている姿が高頻度で観察されている。これらの島での繁殖の有無は不明であるため、まずは繁殖状況を確認する必要がある。

【関連文献】

Chiba, H. et al., 2007; 川上和人ら, 2008.



(執筆者: 川上和人)

ハシブトゴイ

Nycticorax caledonicus crassirostris

ペリカン目
サギ科

小笠原諸島

EX

環境省

EX

【形態・生態】

全長 53cm。背側が褐色で、腹側が白く、頭頂部が黒い。他の亜種に比べ、嘴が太く、全体の羽色が淡色である。食物や繁殖生態については不明である。

【分布の概要】

留鳥として小笠原諸島に分布していた。

【小笠原諸島における生息環境】

海岸の岩礁や、海岸近くの岩場や茂みを利用していた。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1827年、1828年の父島での採集および1889年の媒島での採集記録があるのみで、その後の記録はなく、絶滅した。絶滅原因は不明だが、水辺を主な採食場所としていたと考えられることから、地上性哺乳類による捕食が絶滅の一因と考えられる。

【関連文献】

初山徳太郎, 1930; Greenway, J. C. Jr., 1958.



出典: Kittlitz, F. H., 1832. Kupfertafeln zur Naturgeschichte der Vögel.

(執筆者: 川上和人)

マミジロクイナ

Porzana cinerea brevipes

ツル目
クイナ科

小笠原諸島

EX

環境省

EX

【形態・生態】

全長 18cm。体は全体的に褐色で、頭部が灰色、目の上下に白い線がある。近似種に比べて背と腰に赤味があり、嘴基部が太く、跗蹠が短い。食物や繁殖生態については不明である。

【分布の概要】

留鳥として火山列島に分布していた。

【小笠原諸島における生息環境】

硫黄島の沼地付近に生息し、樹林内や農耕地の地上で採食していた。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1889年に発見され、1924年まで記録があるが、その後はまったく記録がなく絶滅した。絶滅の原因は不明だが、地上で生活していたと考えられることから、ネコなどの地上性哺乳類による捕食が一因と考えられる。南硫黄島のラベルの付いた標本が存在するが、これらは硫黄島産のものと考えられている。

【関連文献】

Seebohm, H., 1891; 初山徳太郎, 1930.



©2012 Yamashina Institute for Ornithology, 山階鳥類研究所

(執筆者: 川上和人)

クロアジサシ

*Anous stolidus pileatus*チドリ目
カモメ科

小笠原諸島 *

環境省

【形態・生態】

全長 39cm。全身が黒褐色で、成鳥では頭頂部が白いが、若鳥では黒い。集団繁殖を行い、6～7月ごろに雛が巣立つ。飛翔時には頻りに羽ばたきを行う。空中からダイビングをして主に海の表層の魚類を採食する。

【分布の概要】

小笠原諸島、世界の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

草原や岩地、砂地、崖の岩棚、人工構造物の上などの開放地で繁殖する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在の小笠原諸島では、西之島、南鳥島、監獄岩および小笠原群島の小属島でのみ繁殖している。地上で繁殖するため、ネズミ類による捕食を受けやすいと考えられる。このため、無人島におけるネズミ駆除を行うことが望ましい。南鳥島、監獄岩では、人の活動による影響が生じる可能性がある。

【関連文献】

川上和人ら, 2005; Chiba, H. et al., 2007.



(執筆: 川上和人)

ヒメクロアジサシ

*Anous minutus marcusii*チドリ目
カモメ科

小笠原諸島 EN

環境省

【形態・生態】

全長 37cm。全身が黒褐色で、頭頂部が白く、クロアジサシと似た羽色を持っている。ただし本種の方が一回り小型で、嘴が細い。クロアジサシの群れに参加していることもある。

【分布の概要】

小笠原諸島、太平洋、大西洋の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

無人島の草原や岩地などの開放地で繁殖する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

硫黄島の属島である監獄岩でのみ繁殖が確認されている。繁殖個体数は不明だが、周辺での観察状況から類推すると、それほど多いとは考えにくい。1902年には南鳥島でも繁殖していたが、ここの繁殖地はすでに消滅している。監獄岩では、人の活動による影響が生じる可能性がある。地上で繁殖するため、ネズミ類による捕食を受けやすいと考えられる。このため、無人島におけるネズミ駆除を行うことが望ましい。

【関連文献】

Bryan, W. A., 1903; 時田賢一・渡辺義昭, 2001.

(執筆: 川上和人)



シロアジサシ

*Gygis alba candida*チドリ目
カモメ科

小笠原諸島 EX

環境省

【形態・生態】

全長 30cm。全身が白く、嘴と目の後方、脚が黒い。幼鳥では背面に茶褐色の斑がある。集団繁殖を行い、繁殖地ではよく木にとまっている。非繁殖期は主に洋上で生活し、海上で小型の魚などを採食する。

【分布の概要】

世界の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

海から近い低地において樹上の枝の叉や樹皮の割れ目などで繁殖していた。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1902年には、南鳥島で繁殖していた記録があるが、乱獲などが原因で局所絶滅した。現在も国外で繁殖した個体が小笠原群島に迷行することがある。

【関連文献】

Bryan, W. A., 1903; Kuroda, N., 1954.



© 戸塚学

(執筆: 川上和人)

オオアジサシ

Sterna bergii cristata

チドリ目
カモメ科

小笠原諸島 NT

環境省 VU

【形態・生態】

全長 48cm。頭が黒く、翼の上面が灰色、嘴が黄色い。尾羽は燕尾型をしている。集団繁殖を行い、雛は早成性で、ふ化した雛が集合して行動することがある。西之島では、7月ごろに雛が巣立つ。飛行時には頻りに羽ばたきを行う。空中からダイビングをして主に海の表層の魚類を採食する。

【分布の概要】

小笠原諸島、インド洋、太平洋西部の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

開放地の水辺の植生がない砂地や岩地で繁殖している。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在の唯一の繁殖地である西之島は、外来哺乳類のいない孤島であるため、対策に急を要する脅威はない。しかし、地上繁殖を行うことからネズミ類に捕食されやすいと考えられるため、侵入を防止することが望ましい。西之島は 1973 年に噴火をしており、今後も噴火の可能性がある。本種の個体数推移についてモニタリングする必要がある。

【関連文献】

Kohno, H. et al., 1997; 川上和人ら, 2005.

(執筆者: 川上和人)



© 川上和人

鳥類

小笠原諸島

セグロアジサシ

Sterna fuscata nubilosa

チドリ目
カモメ科

小笠原諸島 NT

環境省

【形態・生態】

全長 35cm。体の上面が黒く、下面が白い。若鳥は全身が黒く、翼には多数の白斑があり、燕尾型の尾を持つ。集団繁殖を行い、6～7月に雛が巣立つ。飛行時には頻りに羽ばたきを行う。空中からダイビングをして主に海の表層の魚類を採食する。

【分布の概要】

小笠原諸島、世界の熱帯・亜熱帯島しょで繁殖する。

【小笠原諸島における生息環境】

海岸に近い草地や岩地などの開放地で繁殖する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在の小笠原諸島では、西之島、南鳥島、監獄岩でのみ繁殖している。地上で繁殖するため、ネズミ類による捕食を受けやすいと考えられる。このため、無人島におけるネズミの駆除が望ましい。南鳥島、監獄岩では、人の活動による影響が生じる可能性がある。

【関連文献】

川上和人ら, 2005; Chiba, H. et al., 2007.

(執筆者: 川上和人)



オガサワラノスリ

Buteo buteo toyoshimai

タカ目
タカ科

小笠原諸島 EN

環境省 EN

【形態・生態】

全長 50cm。体は褐色で、本州のノスリと似ているが、より白味が強く、小型である。1月ごろから繁殖に入り、6～7月ごろに巣立つ。中小型の鳥獣類や両生類、爬虫類などを捕食する。開放地だけでなく、樹林内でも狩りを行うことがある。現在は、ネズミ類やグリーンアノールなどの外来動物が主な食物となっているが、これらの動物の侵入以前は小型海鳥や陸鳥が主食だったと考えられる。

【分布の概要】

留鳥として小笠原群島に分布する。

【小笠原諸島における生息環境】

樹林から開放地まで広く採食場所として利用する。繁殖には、主に岩棚を利用する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島列島、母島列島には高密度に生息している。クマネズミ駆除が行われている場所では、食物不足により本種の生息数が減少するおそれがある。在来の食物となる小型海鳥や陸鳥の個体数回復が必要である。

【関連文献】

Suzuki, T. & Y. Kato, 2000; Kato, Y. & T. Suzuki, 2005.

(執筆者: 川上和人)



© 川上和人

シマハヤブサ

Falco peregrinus furutii

ハヤブサ目

ハヤブサ科

小笠原諸島 EX

環境省

DD

【形態・生態】

全長雄 38cm、雌 46cm。本州のハヤブサに比べて小型で、翼長に対して尾羽が長めである。基本的な生態は本土のハヤブサと変わらないと考えられる。海鳥を主な食物としていたと考えられる。

【分布の概要】

留鳥として火山列島に分布していた。

【小笠原諸島における生息環境】

樹林内や林冠上、海上などで海鳥を捕食していたと考えられる。硫黄島では岩場でよく観察されていた。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1920～1930年代に硫黄島、北硫黄島で採集された標本を最後に、本種の確実な生息記録はなく、絶滅したものと考えられる。絶滅の原因は不明だが、戦前・戦中の大規模な環境改変や、海鳥の繁殖集団の消滅による食物不足などが一因と考えられる。

【関連文献】

Seebohm, H., 1891; 初山徳太郎, 1930.



©2012 Yamashina Institute for Ornithology.
山階鳥類研究所

(執筆: 川上和人)

ハシブトガラス

Corvus macrorhynchos japonensis

スズメ目

カラス科

小笠原諸島 EX

環境省

【形態・生態】

全長 55cm。全身が黒く、基本的に本土のハシブトガラスと共通の形態を持つと考えられる。生態に関してはほとんど何も分かっていない。

【分布の概要】

留鳥として伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島(屋久島、種子島)に分布する。小笠原諸島では留鳥として分布していた。

【小笠原諸島における生息環境】

主に樹林に生息していたと考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

少なくとも、父島と聳島、媒島に生息していたが、19世紀後半までに父島では個体数が少なくなり、聳島、媒島でも20世紀初頭に姿を消し、小笠原諸島では絶滅した。樹林の減少が絶滅の原因となった可能性がある。

【関連文献】

初山徳太郎, 1930; 樋口行雄, 1984.



(執筆: 川上和人)

ハシブトヒヨドリ

Hypsipetes amaurotis magnirostris

スズメ目

ヒヨドリ科

小笠原諸島 *

環境省

【形態・生態】

全長 28cm。本土のヒヨドリに比べると全身に褐色味が強く、嘴が太い。春～夏にかけて繁殖する。主に昆虫類や果実を採食する雑食性の鳥である。生態については十分に調べられていない。

【分布の概要】

留鳥として火山列島に分布する。

【小笠原諸島における生息環境】

標高を問わず、低木から高木の樹林内に生息している。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

火山列島3島に分布しているが、個体数は多くはない。北硫黄島、硫黄島では、ネズミ類に巣が捕食されている可能性もある。南硫黄島では、生息環境が安定しておらず、モニタリングが必要である。

【関連文献】

初山徳太郎, 1930; 川上和人ら, 2008.



(執筆: 川上和人)

ハシナガウグイス (火山列島個体群)

※備考 (p. 339) スズメ目
ウグイス科

Cettia diphone diphone

小笠原諸島 **LP**

環境省

【形態・生態】

全長 12cm。全身が淡褐色で、本土の集団に比べると体が小さいが、嘴が長い。主に3～5月ごろに繁殖すると考えられるが、火山列島における繁殖生態については調査がされていないため不明である。基本的に節足動物食である。

【分布の概要】

留鳥として小笠原諸島に分布する。

【小笠原諸島における生息環境】

標高を問わず、低木から高木の樹林内に生息している。あまり開けたところには出てこない。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前は、北硫黄島および硫黄島にも生息していたが、これらの島では戦後の確実な生息記録がなく、すでに絶滅したと考えられる。主な絶滅の原因は、クマネズミによる捕食であると考えられる。火山列島では、クマネズミの侵入していない南硫黄島のみが生息しているため、この島へのネズミの侵入を防止することが望ましい。火山列島個体群は小笠原群島個体群と遺伝的に分化している。

【関連文献】

川上和人ら, 2008; Emura, N. et al., 2013.

(執筆者: 川上和人)



ムコジマメグロ

Apalopteron familiare familiare

スズメ目
メジロ科

小笠原諸島 **EX**

環境省 **EX**

【形態・生態】

全長 14cm。体の上面はオリーブグリーンで、下面は黄色い。目の周りに逆三角形の黒い模様がある。ハハジマメグロに比べ体色が薄く、体サイズがわずかに小さい。10～20羽ほどの群れをつくり、昆虫や樹木の果実を採食する。

【分布の概要】

留鳥として小笠原群島(父島列島・聳島列島)に分布していた。

【小笠原諸島における生息環境】

海岸から内陸までの樹林に生息し、地上から1～3mの枝上に営巣していた。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

聳島、媒島、父島で生息記録があるが、1930年の標本採集記録以後には確実な記録がなく、絶滅した。絶滅の原因は不明だが、樹林の伐採やノヤギの食害による生息地の減少が一因となっていると考えられる。

【関連文献】

粗山徳太郎, 1930; 山階芳麿, 1930.

(執筆者: 川上和人)



©2012 Yamashina Institute for Ornithology.
山階鳥類研究所

ハハジマメグロ

Apalopteron familiare hahasima

スズメ目
メジロ科

小笠原諸島 **VU**

環境省 **EN**

【形態・生態】

全長 14cm。体の上面はオリーブグリーンで、下面は黄色い。目の周りに逆三角形の黒い模様がある。3～6月が主な繁殖期で、一夫一妻で子育てを行う。繁殖個体は通年繁殖場所の周辺で過ごす。非繁殖期には群れをつくり、メジロやヒヨドリと混群となることもある。節足動物や果実を好んで食べる雑食性の鳥である。

【分布の概要】

留鳥として小笠原群島(母島列島)に分布する。

【小笠原諸島における生息環境】

湿性高木林を好むが、乾性低木林や農耕地などにも広く生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島および向島、妹島のみが生息する。姪島では1920年ごろには多数生息したが、その後絶滅した。小個体群では、絶滅が生じやすいため、属島でのモニタリングが必要である。島間の移動をしないため、各島で一度絶滅すると自然に回復することは難しい。

【関連文献】

Kawakami, K. et al., 2008; Kawakami, K. & H. Higuchi, 2013.

(執筆者: 川上和人)



オガサワラガビチョウ

Cichlopasser terrestris

スズメ目
ヒタキ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

全長 20cm。全身が褐色である。少数で生活し、群れをつくることはなかった。地上を利用することが多く、地上を走ったり、地面すれすれを飛ぶことはあっても、木の枝にとまることはあまりなかったとされている。小型の昆虫類や甲殻類などを採食していた。

【分布の概要】

留鳥として小笠原諸島に分布していた。

【小笠原諸島における生息環境】

海岸近くの平坦な樹林のいたるところに生息していたと記録されている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1828年に父島で採集された標本があるが、その後は小笠原諸島での確実な記録がなく、絶滅した。地上利用が発達していたため、地上性哺乳類の捕食により絶滅した可能性が高い。靱山徳太郎が1925年に母島石門山において、小型の茶色の鳥を目撃しており、これが本種であった可能性がある。また、1885年には、上野動物園に本種が寄贈され、飼育された記録がある。

【関連文献】

靱山徳太郎, 1930; Greenway, J. C. Jr., 1958.



出典: Seebold, H. & R. B. Sharpe, 1902. A monograph of the Turdidae or family of Thrushes Volume 1.

(執筆: 川上和人)

オガサワラカワラヒワ

Chloris sinica kittlitzi

スズメ目
アトリ科

小笠原諸島 CR

環境省 CR

【形態・生態】

全長 13cm。本土のカワラヒワに比べ、体サイズが小さいが、嘴が相対的に大きい。4～6月ごろが主な繁殖期で、非繁殖期には繁殖地外の島にもしばしば渡来する。種子食で、地上でも樹上でも採食を行う。

【分布の概要】

留鳥として小笠原諸島に分布する。

【小笠原諸島における生息環境】

乾性低木林を好んで繁殖する。採食には、開けた場所も利用し、農耕地やグラウンド、集落内の草地などにも出現する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種は聳島列島、父島列島、硫黄島、北硫黄島では絶滅した。現在はクマネズミが生息しない島でのみ繁殖することから、上記の島ではクマネズミの捕食により絶滅したと考えられる。このため、保全のためには、ネズミ駆除を行うことが望ましい。また、地上採食をよく行うため、ネコに捕食されていることも知られている。非繁殖地への渡来時の捕食を回避するため、有人島でのネコの管理を行うことが望ましい。

【関連文献】

Nakamura, H., 1997; 川上和人ら, 2008.



(執筆: 川上和人)

オガサワラマシコ

Chaunoproctus ferreirostris

スズメ目
アトリ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

全長 18cm。雄は体色が赤く、雌では黄褐色。体サイズに対して嘴が大きいことが特徴。つがいまたは単独で生活したとされるが、繁殖生態は不明である。植物の陰で行動しており観察が容易でないが、警戒心は少なかったとされている。地上をよく利用し、高い樹上はあまり利用しなかった。果実や木の芽などの植物を採食していた。

【分布の概要】

留鳥として小笠原諸島に分布していた。

【小笠原諸島における生息環境】

海岸近くの樹林に生息したと記録されている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1827年、1828年に父島で採集された標本以外に確実な生息記録はなく、すでに絶滅している。1889年には、母島には生息していたという伝聞情報がある。地上利用が発達していたため、ネコなどの地上性捕食者の影響が大きかったと考えられる。羽色も声も美しかったことから、乱獲された可能性もある。

【関連文献】

靱山徳太郎, 1930; Greenway, J. C. Jr., 1958.



出典: Rothschild, W., 1907. Extinct Birds.

(執筆: 川上和人)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、次の文献に準拠した。

日本鳥類目録編集委員会 (編), 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版 . 日本鳥学会 .

【備考】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
ハシナガウグイス (火山列島個体群)	硫黄 3 島のうち硫黄島と北硫黄島ではすでに絶滅し、南硫黄島にだけ残っている状況であり、火山列島の個体群は EN に相当する。

【留意種とした理由】

和名	留意種とした理由
クロアジアホウドリ	最近のノヤギ排除事業により、小笠原諸島では増加傾向にある。しかし世界的には、漁業での混獲による減少傾向があり、IUCN のレッドリストでは EN に掲載されているため、今後の動向に留意する必要がある。
クロアジサシ	島しょゆえに生息地面積は狭いが、分布は広く、個体数も多い。ただし、西之島の噴火、監獄岩および南鳥島における人為的活動の影響などが生じれば、個体群の存続へも影響する可能性があるため、今後の動向に留意する必要がある。
ハシブトヒヨドリ	特に減少傾向は見られないが、火山列島の固有亜種であり、分布域は狭い。また、南硫黄島は生息環境が安定しておらず、今後の動向に留意する必要がある。

【関連文献】

- Bryan, W. A., 1903. A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers Bishop Museum*, 11: 77-126.
- Chiba, H., K. Kawakami, H. Suzuki & K. Horikoshi, 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, Southern Japan. *Journal of Yamashina Institute for Ornithology*, 39: 1-17.
- 千葉勇人・佐々木哲朗・堀越和夫, 2012. 北之島におけるシロハラ ミズナギドリ *Pterodroma hypoleuca* 繁殖の再確認. 小笠原研究年報, 35, 45-48.
- Emura, N., H. Ando, K. Kawakami & Y. Isagi, 2013. Genetic and morphological differences among populations of the Japanese Bush-warbler (Aves: Sylviidae) on the Ogasawara Islands, Northern Pacific. *Pacific Science*, 67, 187-196.
- 福寿兼央・坂下智宏・堀越和夫・千葉勇人, 2011. 父島列島におけるクロアシアホウドリ *Diomedea nigripes* の繁殖記録. 小笠原研究年報, 34: 75-78.
- Greenway, J. C. Jr., 1958. Extinct and Vanishing Birds of the World. American Committee for International Wild Life Protection. 520 pp.
- 長谷川博, 1992. 海洋性鳥類の現状およびノヤギによる影響の評価. 日本野生生物研究センター(編). 小笠原諸島における山羊の異常繁殖による動植物への被害緊急調査報告書, pp. 85-100. 日本野生生物研究センター.
- 樋口行雄, 1984. 小笠原諸島の鳥類目録. *Strix*, 3: 73-87.
- Kato, Y. & T. Suzuki, 2005. Introduced animals in the diet of the Ogasawara buzzard, an endemic insular raptor in the Pacific Ocean. *Journal of Raptor Research*, 39: 173-179.
- Kawakami, K., M. Eda, K. Horikoshi, H. Suzuki, H. Chiba & T. Hiraoka, 2012. Bryan's shearwaters have survived on the Bonin Islands, Northwestern Pacific. *Condor*, 114: 507-512.
- Kawakami, K., Harada, S., Suzuki, T. & Higuchi, H., 2008. Genetic and morphological differences among populations of the Bonin Islands White-eye in Japan. *Zoological science*, 25: 882-887.
- Kawakami, K. & Higuchi, H., 2003. Interspecific relationships between the native and introduced white-eyes in the Bonin Islands. *Ibis*, 145: 583-592.
- Kawakami, K. & Higuchi, H. 2013. Estimation of the population size and viability of the Bonin White-eye *Apalopteron familiare* in the Bonin Islands, Japan. *Ornithological Science*, 12, 51-56
- Kawakami, K., Horikoshi, K. & Suzuki, H., 2010. Severe predation impacts by invasive black rats *Rattus rattus* on the Bulwer's petrel *Bulweria bulwerii* in the Bonin Islands, Japan. In: Kawakami, K. and Okochi, I. (eds.) Restoring the oceanic island ecosystem, pp. 51-55. Springer.
- 川上 和人・鈴木 創・千葉 勇人・堀越 和夫, 2008. 南硫黄島の鳥類相. 小笠原研究, 33: 111-127.
- 川上和人・山本裕・堀越和夫. 2005. 小笠原諸島西之島の鳥類相. *Strix*, 23: 159-166.
- Kohno, H., Sakaguchi, N. & Chiba, H., 1997. The breeding status of Crested terns in Japan. *Journal of Yamashina Institute for Ornithology*, 29: 91-96.
- 倉田洋二, 1978. 小笠原諸島におけるコアホウドリ繁殖の記録(速報). 山階鳥類研究所研究報告, 10: 185-189.
- Kuroda, N., 1954. Report on the trip to Marcus Island with notes on the birds. *Pacific Science*, 8: 84-93.
- 羽山徳太郎, 1930. 小笠原諸島並に硫黄列島産の鳥類に就て. 日本生物地理学会会報, 1(3): 89-186.
- Nakamura, H., 1997. Ecological Adaptations of the Oriental Greenfinch *Carduelis sinica* on the Ogasawara Islands. *Japanese Journal of Ornithology*, 46: 95-110.
- Pyle, P., A. J. Welch, & R.C. Fleischer, 2011. A new species of shearwater (*Puffinus*) recorded from Midway Atoll, northwestern Hawaiian Islands. *Condor*, 113: 518-527.
- Seebohm, H., 1891. On the Birds of the Volcano Islands. *Ibis*, 4: 189-192.
- 鈴木創・柴崎文子・鈴木直子・堀越和夫・障子巳和子・障子幹・坂入祐子・高野肇, 2006. 小笠原諸島におけるアカガシラカラスバト *Columba janthina nitens* の島間移動. *Strix*, 24: 99-107.
- Suzuki, T. & Y. Kato, 2000. Abundance of the Ogasawara Buzzard on Chichijima, the Pacific ocean. *Journal of Raptor Research*, 34: 241-243.
- 高野肇, 2002. 幻の鳥は幻のまま消えるのか — アカガシラカラスバト. 森林科学, 34: 19-21.
- 時田賢一・渡辺義昭, 2001. 硫黄島鳥類目録(1999年10月～2000年8月). 我孫子市鳥の博物館調査研究報告, 9: 35-45.
- 山階芳麿, 1930. 聳島列島の鳥類. 鳥, 6: 323-340.